



THINK × ACT
KANSAI
UNIVERSITY



CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

Newsletter



関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

December 2011

vol. 07

全学の「教育的資源」の十全な活用を!



教育開発支援センター長
田中 俊也

Developmentということばはわれわれ心理学の研究者仲間では、一切の前提なく「発達」と訳される。もともと個々にそなわっているさまざまな資質や力量は、巾着のようなもの、巻物のようなものに包み込まれ、閉じ込められている（velopされている）が、その束縛を解かれ外され（de-）、そこからどんどんそれらが広がっていくさまを発達という言葉で表す。いわば、個体の内部に存在する発展可能性を示したのもといえよう。これが自力では十分に発展しない場合、まわりの力で外へ（e-）取り出す（duce）という行為が行われる。Educationとしての教育の登場である。

異なる領域ではdevelopmentを「開発」と訳すことがある。開発は、人に対して使われるときは上記のeducationに近い意味を持つこともあるが、自然の事物に対する開発は、その「事物」は人間にとって望ましくない形態をもっており、それを望ましい形に変えることを意味する。この、外部からの力で対象を変化させる、という意味が開発ということばにはつきまとう。

また、「能力」ということばは、さまざまな種類の資質や力量を示すことがある。たとえばabilityとしての能力はそれができるか

どうかを中心にしたものであり、competenceは、表には現れないが潜在的に持っている「力」を示すものとして用いられる。こうした中で、facultyは、特殊な事務能力や教員集団の職能を示している。

ここで最も曖昧なのが、教員集団の職能としてのfacultyが何を示すかである。大学教員は主に研究活動を行い優れた研究業績を持って大学に任用される。しかしながら大学は研究所とは異なり、研究に教育、最近には特に社会貢献等までが要求される。その教育の力をfacultyとしたとき、大きなとまどいが生じることとなる。とまどいは、「包み込まれ」「閉じ込められた」ものを自覚することであり、立派な研究業績を持ってcompetenceを喧伝するだけでは当の教員・学生双方にとって不幸である。

そのde-velopのお手伝いをするのが本「教育開発支援センター」である。あくまでも主体はそれぞれの先生方であり、その「能力」を「開発」してさしあげる、などとは毛頭考えていない。学内のさまざまなツール、院生・学部生等の教育補助者としての人的リソース、教育活動を支えていただいている事務スタッフとの交流等、全学の教育的資源を有効に活用して、先生方のfacultyのfull-developmentをサポートすることが使命である。

その意味では今後、本センターの英語訳である、CTL (Center for Teaching and Learning) という名称（シー・ティー・エル）を前面に出し、関西大学の大きな特徴として皆様に語っていただきたいものである、と切に願っている。

フォーラム・セミナー報告

第5回関西大学FDフォーラム「きく力を涵養する」を開催しました

日時：2011年7月14日(木) 14:40～16:10 講師：穂田照子氏(桜美林大学准教授)

関西大学教育開発支援センターが、教育GP「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」に着手して、はや三年が経過しようとしています。「アクティブ・ラーニング」の実施においては、学生が自ら思考し、表現することを促す授業作りが基軸のひとつになりますが、思考や表現といった「アウトプット」の質を向上させるには、「インプット」の質にも着目する必要があります、ということが取り組みを通じて明らかになってきました。分けても、「きく」というプロセスは、大学の授業の中での「インプット」の多くを占めています。ですから「きく」の質を上げること、そして、「自らきく」という姿勢を学生の中から引き出すことが、授業の成果をあげ、すぐれた学習成果をうみだす鍵を握っていると言えるかもしれません。また、「きく」に対する学生の意識を高めることは、私語の抑制など学習環境の向上にもつながるといわれています。

このような理由から、当センターは「きく」に着目しています。そこで、フロンティアとして「きく力」を伸ばすための先進的なプログラムを実践しておられる桜美林大学の

穂田照子准教授をお招きし、学生のきく力を涵養するために授業のなかでなにができるか、についてご講演いただきました。ご講演は、「きく」という行為には「聞く」、「聴く」、「訊く」などの複数の種類があること、単純に見えるそれらの行為が、実際には複合的なプロセスからなること(HURRIEモデル、MKSPモデルのご紹介)、など基本的な概念のご説明から、「きく力」をひきだすために通常授業のなかでもできる工夫やノウハウ、また正課としての「きく力」育成の教育プログラムやその効果、といった具体的な実践部分にまでわたり、実際に「きく」が学生にとって幅広い学習の基礎となっていることが(たとえば、聴く力のある学生が、大学院博士課程に多く進む、といった研究結果などのご紹介も交えて)明確に示されていました。

本学にはまだ、具体的な正課の授業として「きく」にのみ焦点を当てた科目はあ

りませんが、今回のフォーラムでは定員100人余りの教室が満員となったことから、多くの先生方から「きく」に対する期待が寄せられているということがうかがえます。より深いレベルでのアクティブ・ラーニングの推進や、授業環境の改善という観点からも、本センターとしてはさらに積極的に「きく力」を育てる手法の紹介や情報提供に努めてゆく必要があると考えています。また、授業科目を正課として立ち上げてゆくという方向性を検討してゆくことも、今後の課題の一つとしてあげられるかも知れません。(教育推進部 須長一幸)



穂田講師ご講演の様子

スタディスキルゼミ担当者情報交換会(ワークショップ)を開催しました

日時：2011年8月30日(火) 13:00～16:00

大学での学びに必要な基礎的スキルを少人数ゼミ形式で総合的に訓練する授業として、全学共通科目のB群/エンパワメント科目群にスタディスキルゼミが開講されている。

このスタディスキルゼミが7つの各テーマ(「ノートをとめる」・「パソコンで学ぶ」・「レポートを作成する」・「プレゼンテーション」・「ディベート」・「課題探究」・「新聞で学ぶ」)に分けられ、早くも3セメスターが経過しました。テーマが多様化したことに伴い、学生のニーズに即したきめ細やかな授業を運営することが可能になった一方で、新しく開講された授業を担当される先生方のご負担が増えたことは想像に難くありません。

そこで本センターでは、去る8月30日に、スタディスキルゼミをご担当いただいている先生方を対象に、授業運営に益すること

を主眼としたワークショップ形式の情報交換会を開催いたしました。

プログラムの内容としては、先生方の日頃の授業実践を通じて得られた知見や授業実践事例、受講学生の傾向などといった情報交換を中心としたものといたしました。新しく開講された科目を担当する先生方のご苦勞の多くは、授業運営に関するノウハウやTIPS、コンテンツ等の情報不足によるものが多いと考えたためです。

参加された先生方は、ご自身の授業の到達目標やねらい、また、授業において工夫されたことや、問題や課題を感じた点等、言葉を尽くし丹念に情報をご提供くださいました。シラバスのみならず授業実践のとりまとめをご持参くださった先生や、授業における具体的なTIPSをご提

供くださった先生もおられました。授業実践の中で発生した要望が先生方から寄せられる場面もあり、本センターとしましては貴重なご意見を伺う良い機会にもなりました。情報交換が活発に行われ、「教員の固有の営みである授業実践の中であって、共通の課題があるのではないか」ということが見え始めたところで、ワークショップの終了時刻となりました。

午後一杯を使つての「スタディスキルゼミ担当者情報交換会(ワークショップ)」。長丁場ではありましたが、たいへん密度の濃い情報交換のひとつときを持たせていただきました。

当センターでは、今後も先生方のニーズに即した情報交換会を開催したいと考えております。ご要望など、どうぞお気軽にセンターまでお寄せくださいますようお願い申し上げます。(教育開発支援センター)

Summer Cafeを開催しました

日時：2011年9月14日(水) 10:00～12:30

今年も夏期の新任教員研修企画として、Summer Cafeを9月14日に、前回と同様、関西大学着任後3年以内の先生方を対象として開催しました。

今回は、着任後の活動を振り返りながら意見や情報などの交換を図る午前部と、午前部以上に自由に語り合うランチミーティングの部の2部構成としました。

午前部を開始するにあたってはクリッカーを用いたアイスブレイクを試みました。これは授業における学生と教員間のコミュニケーションチャンネルの一案として提示したものです。参加者の中には独自で同様のツールを創作された方もあり、このようなツールへの関心の高さがうかがわれました。

その後ダイアログをしました。意見や情報を具体的なものにするために、振り返る内容をいくつかの項目に絞りました。具体的には、組織、学習環境、カリキュラム、教員同士の情報

交換、そして授業(シラバス、授業設計、評価等)のそれぞれにおいて、比較的良好な状態にあるもの、そうとはいえないものをマップ風に提示し、以後のダイアログのきっかけを作りました。

「比較的良好な状態にあるもの、つつがなく展開している実践」については、それを可能にしていると思われるキーファクターを参加者が等しく認識できるように、つまり共有できるように、他方、「良好な状態にあるとはいえない事柄」については、それを課題としてどのように解決するのが良策と考えられるかについて、それぞれ意見や情報を出し合いました。

授業について比較的良好な状態にあるものとして、「学生とのコミュニケーションを図るために教材を工夫している」、「成績評価について工夫している」といった実践事例が示され、その具体的な方法について担当者に開陳していただきました。また、授業の運営等を巡る課題としては、「私語についての問題」、「他の授業との関連性(カリキュラム上の関係)を十分に把握できていない」「グループワークのグループ分けの方法に困る」といった意見が出され、これらの課題にどのように対処していけばよいかについて参加者全員で話し合いました。なお、授業

の運営を巡る課題については、春学期に実施された授業評価アンケート結果の速報も資料として提示され、話し合いのヒントとなりました。

Cafe閉店後のアンケートでは「よかった点は、自分が所属していない学部の方の意見を伺うことができた点です。」「学生の学びを支援するツールをご紹介いただいた点も感謝しております。大学で提供している各種ツールについて理解が不足しているため、有意義な時間を過ごすことができました。」といった意見が参加者の先生方から寄せられました。

このほか、「大学1年生向けのゼミ・導入科目を担当する教員を対象とした研修を希望する」といった声も寄せられました。その開催については是非とも前向きに検討していきたいと思っております。

(教育推進部 岩崎千晶・三浦真琴)



Summer Cafeのワークに取り組む先生方

TA研修を開催しました

日時：2011年9月15日(木) 10:00～12:30

9月15日に第4回TA研修を開催しました。秋学期に活動するTA42名のうち、27名が研修に参加しました。今回の研修も、前回に引き続き2部構成で実施しました。第1部は、今学期にはじめてTAとなる新人TAのみの研修、第2部は新人TAとTA経験がある継続TAを交えた研修としました。

第1部では、関西大学教育開発支援センターにおけるTAがどのような活動をしているのかを把握すること、高等教育における政策動向について理解すること、そしてTAの基本的な業務態度や事務的な手続きについて確認することを目的とし、レクチャー形式で進めました。

第2部では、新人TAと継続TAが交流することで、TA同士で学び合う場を設けました。まずはミニレクチャーとして、学内で活用できるICTシステムであるインフォメーションシステム、CEAS/Sakaiシステム、関西大学SNS、クリッカー(双方向コミュニケーションを可能にするオーディエンスレスポンスシステム)、Handbook(スマートフォンに問題を配信できるシステム)の概要や利用方法について話しました。

その後、TAは下記から希望するテーマを選び、グループに分かれて、ワークショップを行いました。

- ①グループワークにおいて、学生の考えを引き出したり、学生の合意形成を支えたりする工夫
- ②ミニッツペーパーやCEASへの投稿へのまとめやコメント提示における工夫
- ③教材や小テストを作成、添削、解説する際の工夫
- ④統計など数学を用いた授業は苦手だと感じる学生に、興味を持たせ、理解を促すための工夫
- ⑤外国語への興味関心を高めることや、発音指導における工夫
- ⑥学力や動機に差がある学生への対応における工夫

ワークショップでは、まず継続TAは、「TA活動でうまくいっていること」「うまくいっていないこと」を付箋に書き込み、新人TAは、「上手にいくよう努力したいこと」「継続TAに聞いてみたいこと、不安に思っている

こと」について付箋に意見を記し、ブレインストーミングをしました。その後、KJ法を活用し、提示された意見をカテゴリー化することでうまくいっている活動を共有し合い、課題となっていることを解決するように試みました。

たとえば、「①グループワークにおいて、学生の考えを引き出したり、学生の合意形成を支えたりする工夫」では、継続TAから活動でうまくいっていることとして「グループ内であまり発言できていない学生には経験談などを話させるなどして発言の機会を与えてあげる。いきなり意見やアイデアを出してと言われても、すぐにできる学生とできない学生がいる。できない学生には経験談が話しやすいので、その話からTAがアイデアを拾う」という意見が出ました。ほかにも、「とても良く発言する学生、発言したい学生をどのように上手に聞き役に回してあげるか、グループがその子の意見に引かれる場合がある」といった意見もあげられました。また、新人TAからは、継続TAに聞いてみたいこととして「学生からの質問にうまく答えられなかったらどうすべきか」等の意見が寄せられ、継続TAがそれについての意見を話し合う場面も見受けられました。また継続TAからも「グループワークのとき学生それぞれの興味が違う場合、どの意見を取るか(グループの総意見をまとめると)」といった疑問が出され、活発な意見交換がなされました。

第2部終了後は、TA同士の交流を深めるために、TA情報交換会を開催しました。自由参加でしたが、多くのTAが参加し、研修とは違った雰囲気の中で意見交換が行われました。

TA制度に関するご意見・ご提案をお待ちしています! 連絡は、ciwasaki@kansai-u.ac.jpまでお願いします。

(教育推進部 岩崎千晶)

TA通信を毎月発行しています!

TSネットワークでは、TA通信を毎月発行しています。TA通信は、TAを活用した授業実践の事例を教員同士が共有し合うこと、TAが活動の中で工夫している点をTA同士で共有することを目的としております。TA活動の概要や、TAの視点による学生との対話や学習補助における工夫を紹介しています。ぜひご一読ください!

URL <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/outline/ta05.html>

Learning Assistant

LA活動報告

■学生FDイベントに参加しました

日時：2011年8月27日(土)～28日(日)(学生FDサミット2011夏)、9月10日(土)～11日(日)(i*See 2011)

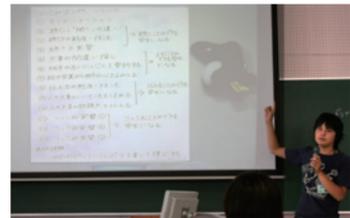
8月27～28日に立命館大学衣笠キャンパスで「学生FDサミット2011夏」、9月10～11日に岡山大学で「i*See 2011」と、FD活動に携わる全国の大学の学生・教職員が集まり、取り組み紹介や意見交換を行うイベントが開かれ、LAの有志が参加しました。

LAは、他大学の様々な特色や取り組みを知り、同じような立場の知己を得ました。加えて、初顔合わせのメンバーとのグループワークでファシリテーターを務め、大人数の前で発表をするなど、LA活動で培った実力を遺憾なく発揮しました。以下、参加したLAの声を紹介します。

「勝ちに行こう！」

政策創造学部3回生 片山曜啓 (FDサミットに参加)

グループワークでコーディネーターを、発表の際にプレゼンターを務めたのが良い経験になりました。私のグループでは「どんな授業が良い授業?」をテーマで、クリティカルシンキングを身につける「つっこみ学入門!!」という授業を考え、15回の授業のシラバスを作り発表しました。同じグループになった他大学生の「勝ちに行こう!」の言葉で、リハーサルを繰り返し、予選を勝ち抜き、300人弱の前に全体発表をしました。全体発表では、100人程度だった予選よりも聴衆の反応が冷たく緊張しました。聴き手のうなずきやアイコンタクトが発表者を楽にすることを実感しました。全体発表では違うグループにいたLAも登壇し、初参加ながら自分たちはよく頑張ったと思いました。他大学の人達と関わる機会は滅多にない事なので、他のLAにも外部の活動に参加することの重要性を伝えたいです。



立命館大学「学生FDサミット」で発表するLA

「LAスキルが役立った」

文学部2回生 竹村祐哉 (i*Seeに参加)

一番の思い出は他大学の学生や教職員の方と真剣に話げできたことです。他大学の活動を知って考えの幅が広がったし、また自分の考えを相手に伝え、分かってもらう難しさも知りました。グループディスカッションでは、司会役が困ったときは助言をしたり、板書をしたりするなど、LAとして培ったスキルを少しでも発揮できたことはとても嬉しかったです。i*Seeへの参加を通じて他大学の良いところ、課題を知り、また関大のLAの素晴らしさ、課題も発見しました。やはりいろいろな大学の人と話すことが大切だと改めて実感しました。



岡山大学「i*See」に参加したLA

■学内活動

[LA合宿研修]

日時：2011年10月9日(日)～10日(月)

10月9～10日に高槻キャンパス高岳館でLA合宿を開催し、23人のLAが参加しました。合宿のために数名のLAが運営委員会を作り、「ディスカッションスキルを身につける」というテーマを掲げ、2か月に渡って準備を行いました。全てのワークをLAが作り、講師もLAが務めました。ディスカッションスキルには、司会、書記、聴き手、発言者などLAにとって重要な役割が凝縮されており、真剣に取り組む企画者・参加者双方から自己研鑽に努める意識の高さが垣間見えました。参加したLAからは「新しく入ったLAとの関係づくりの場として、またLAのスキルアップや自信につながり、有意義な合宿となった」との声が聞かれました。今後もLAの持つ知恵や工夫の共有、交流促進のための研修・合宿を続けていきたいと考えています。



グループワークに取り組むLA

[学園祭での情報交換会「スタディスキルを身につける(学祭で語る)」]

日時：2011年11月5日(土)13:00～16:00
11月6日(日)11:00～13:00

関西大学統一学園祭の研究発表で、LAの活動内容の展示と、授業支援SA・科目提案学生委員との情報交換会を行いました。授業支援SA、科目提案学生委員も授業改善に携わる学生スタッフですが、これまでLAを含めて互いに交流の機会がありませんでした。情報交換会では、互いの活動を紹介し合い、学生の視点から授業改善について意見交換することを目的としました。初の試みであり、自己紹介・活動紹介では緊張感が見えたものの、時が進むにつれ、学生にできる改善案や大学に望む事などが議論されました。今後も同様のイベントの開催や、合同で学外の学生FDイベントに参加するなど、連携を模索していきたいと考えています。

(研究員 今岡義明)

プロジェクト「ICT活用授業の普及活動」活動報告

第1回ランチョンセミナーを開催しました

日時：2011年11月11日(金) 12:20～13:30

教育開発支援センターでは、「ICT活用授業の普及活動」プロジェクトの一環として、授業におけるICT活用によるアクティブ・ラーニングの促進に向けて11月よりランチョンセミナーを始めました。ここでは、11月11日に行われた第1回目のランチョンセミナー「クリッカーの活用について」のご報告をいたします。第1回目でも周知も至らない状況ではありましたが、16名の教職員がご参加くださいました。まず、クリッカーのデモンストレーションを行いました。併せて、本学の活用実績や活用事例の紹介及び利用にあたって必要な準備や手続きに関して説明しました。専任教員に加え、非常勤講師の先生方にもご参加頂き、クリッカーの活用に関して質問や意見交換が行われました。

今後は毎月第1金曜日のお昼休みの時間に実施する予定です。本年度は多人数授業でのアクティブ・ラーニング及び教員・受講生間のインタラクティブ性の促進支援をテーマに、「多人数講義シリーズ」で開催していく予定です。カジュアルな雰囲気の中で昼食をとりながら、授業支援用ICT機器について知っていただき、幅広く活用していただくことを目指しています。



ランチョンセミナーの様子

ランチョンセミナー 「多人数講義シリーズ」

- ・第1回：授業内で受講生の興味や理解度を把握するには? 「クリッカー」を用いて
11月11日(金)
- ・第2回：学生の提出物を円滑に管理するには? :
12月2日(金)
- ・第3回：受講生に授業時間外にも意見交換させるには?
1月6日(金) 12:30～13:30
第2学舎1号館1階共通会議室3(予定)

以下、第1回目のランチョンセミナーでご紹介した「クリッカー」について報告いたします。

アクティブ・ラーニングの実践例： 「クリッカー」を使って

本学には授業の円滑性や効率性を高めるため、ICTを活用したさまざまな取り組みが準備されています。今回よりシリーズで学内に準備されているICTを活用した授業支援ツールについて紹介していきます。

多人数の授業では得てして教員からの一方通行の講義になりがちですが、近頃の学生は集中力が継続しなくて、ついつい私語が多くなったり、寝てしまったりしている受講生の行動が気になるようなことはありませんか。

ここでは、多人数の授業でも受講生との双方向のコミュニケーションを取りながらその場で学習内容についての興味や理解度を確認しながら授業を展開できる仕組み、「クリッカー」についてご紹介します。



図1：クリッカーのレスポンス・カード



図2：クリッカーのレーザー

「クリッカー」は受講生一人一人に予め配付したレスポンス・カードと教員のパソコンにUSB接続されたレーザーからなる簡単な通信機器です。パソコンのスクリーンに受講生に対する問いかけを表示し、受講生はレスポンス・カードのボタンで反応を返してきます。受講生全員が回答し終わると集計結果がグラフでスクリーンに投影され、クラスにいる全員で共有することができます。授業の進行に合わせて、節目節目で教員と受講生が情報のキャッチボールをすることで、受講生の反応を確認しながら授業展開をすることが可能になります。

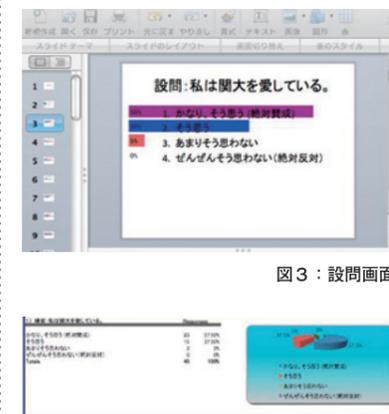


図3：設問画面

図4：集計結果画面

「クリッカー」は教員のみが授業で活用するだけではなく、受講生のプレゼンテーションの中で視聴者の反応を瞬時に可視化したりすることもできます。つまり、「クリッカー」を利用することで、受講生参加型の授業形態が達成できます。

また、「クリッカー」を利用して集計した情報はエクセル形式のレポートとして保存することができます。授業の記録として受講生と共有することが出来ますし、ふりかえりの資料としても利用することもできます。

「クリッカー」を授業でぜひ利用してみたいとお考えの方は、教育推進部、授業支援ステーションまでご連絡ください。使用方法の説明から授業内での運用までスタッフによる懇切丁寧な支援をいたします。(教育推進部 三浦真琴・山本敏幸・岩崎千晶)



図5：受講生によるクリッカーを使ったプレゼンの様子

教育開発支援センターからのお知らせ

秋学期授業評価アンケート(最終アンケート)の実施について

関西大学では、各学期の中間(中間アンケート)と期末(最終アンケート)に授業評価アンケートを実施しています。最終アンケートの実施概要並びに昨年度からの変更点について、以下に記載します。

【実施概要】

実施期間：2012年1月5日(木)～1月21日(土)

実施様式：「講義系科目」「外国語科目」「その他科目」のいずれか(全て紙方式のみ)

用紙の配付：10月に実施した「実施に関する事前調査」への回答結果をもとに用紙を準備します。専任教員分の用紙はメールボックスへ投函し、非常勤講師分の用紙は講師控室にて配付します。

【変更点①】

教員版アンケートについて

今年度から、「講義系科目」「外国語科目」については「教員版アンケート」を実施しています。教員版アンケート用紙は科目毎に学生回答用紙とともにお届けしますので、ご回答をお願いします。

【変更点②】

フィードバックシートについて

今年度から、詳細なアンケートの実施結果を表わす「フィードバックシート」を閲覧できるようになりました。「フィードバックシート」は従来の単純集計に加え、「どの項目から改善すればよいか」の目安を表示しています。さらに、教員版アンケートに回答することによって、担任者と受講生の意識の違いも把握できるようになっています。

「フィードバックシート」は「インフォメーションシステム」内の「授業評価アンケートシステム」からご覧ください。

その他、授業評価アンケートに関するお問い合わせは、教育開発支援センター(第2学舎1号館1階)までお尋ねください。(CTL事務局)

教員版アンケート様式



CTL事務局では、ニュースレターの編集に加えてフォーラム・セミナーの運営や各プロジェクトにおける意見提言等、幅広く業務を行っております。いわゆる「教職協働」を具現化した組織と言えるかと思えます。

FDに「教職協働」つまり職員の関わりは必要ない、という意見もあります。確かに、FDは「Summer Cafe」「スタディスキルゼミ担当者情報交換会」「ランチョンセミナー」のような教員同士の交流の場づくり、及びそのような場を土台として実現出来る教員の能力開発のことを指します。したがって、FDは教員が推進すべ

きものだと考えることも出来ます。とはいえ、職員はスケジュール調整や会場設営、議事録等資料作成を行っていれば十分なのでしょうか。

例えば「授業支援グループ」に所属する職員は、リアルタイムで教員のニーズや教育現場で生じる問題点に触れています。職員がこのようなニーズや問題点をプロジェクトのメンバーとして発信することがFD推進に有用な場合もあると考えます。また、SA,TALAのように授業内外で教員や学習者を支援する学生スタッフが多数活躍していることも見逃せません。つまり、学生や職員も十分FDを推進しうる(してい

る?)と言えるのではないのでしょうか。

本ニュースレターは、教員だけでなく学生、研究員、職員も執筆しています。その狙いは「本学のFDは『教職協働』を超えて取り組んでいる」ことをお伝えする点にあると言っても過言ではないかもしれません。特に今号は各執筆者の溢れんばかりの魂を通常の4ページに収めきれず、ページを増やしてお届けすることとなりました。今号の記事を全てご覧頂き、本センターのFD魂(?)を感じて頂ければ望外の喜びです。今後とも本センター並びにニュースレターを宜しくお願い致します。

(喜)



関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514
http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html

発行日/2011年12月16日 編集・発行/関西大学教育開発支援センター